# アンブレラ
# ・
# ガール

道玄坂杏子

# 0

　いつもそれが何だか分からない。 体の奥に淀んでいるもの。後悔のような気もするし、懺悔のような気もする。思い出なのかもしれないし、感傷だったかもしれない。常に涙が出そうなくらい乾いていて熱い。胸を抜けて目の前を漂うそれを見ながら、私はまだ背骨の辺りにその残滓を感じている。軽い疼き、あるいは、微熱を帯びたしこり。肌の感触。皮膚と、皮膚の下の筋肉の動き。大きく硬い骨の重み。匂いと温度。断片化。ばらばらになってしまったあなた。あるいは、ばらばらになってしまったわたし。夢の中の記憶。こんなものは何でもない。何でもないから忘れてしまうほうがいいのに、思い出せないまま名残だけが証拠みたいに記憶の裏側に張り付いている。

　粘度だけ高く色のない空気。口いっぱいに押し込まれて息が止まる。視界はあちこちが欠落してうまく見渡せない。不具合だらけだ。あなたがその手の中に握りしめている、少女が、鏡の間でベッドを覆う天蓋を開く。右足を太腿から切り取られた女が、快感と血を垂れ流しながらもだえている。悦楽に。重なっていく、背後から見知らぬ男に犯されながら叫ぶ声が悲鳴のように長く尾を引く。

# 1

　目が覚めるたびに繰り返される失望。地球の中心の、引力の記憶。目蓋を開くまで深い奈落に落ち込んでいる。いい加減うんざりしている朝が来る。

　けたたましくなる携帯電話と青いカーテンの向こう側から刺す黄色い光が、あまりにはっきりとした形をしているので、不意にもう一度目を閉じる。心臓が痛い。朝の色だ。青と灰色の混ざった暗くコントラストの薄い色彩の中で、大量の空き缶とグラスが押し黙っている。朝の空気、さめざめとした、嘘泣きのような温度。頭痛と嘔吐。青い渦。空き缶とグラス以外の、大量のスナック菓子とコ ンビニ袋が空いているものも空いていないものも床やテーブルに敷き詰められている。皆、思い出すのもの面倒になるくらい酔ったときの徴候だった。 短く息を吸うとカラオケルームの匂いがする。安い酒とスナック菓子の油の匂い。冷たい床と、冷たい椅子。 来客があった。一昨日も、一週間前も、確か一ヶ月以上前から。だってグラスがある。グラスを出すのはその男のためだけだから男はおそら く来たはずだし、私と寝た後そのまま帰ったはずだ。だから、部屋には誰もいない。私はひとりで、今日の講義は十時半、今は九時。もうあまり時間がない。

　昨日のままの服を脱ぐ。素肌を晒した全身からアルコールの匂いが立ち上る。髪からは精液の匂いがする。匂いで呼び覚まされるのは欲望で はなく、胃の奥の残留物だけだ。肩の辺りが妙に熱い。グラスをコンビニ袋に入れ、思い切り床に打ち付けた。派手な音がする。冷静になれという。私はまだ冷静だし、いつも冷静だ。証拠にグラスの破片は一つも飛び散っていない。

## 2

　砕けたグラスと空き缶をマンションのダストボックスに放り込み、表通りに出る。鋭く張りつめた冷気の向こう側、自動車の籠もったエンジン音、ヒールの突き刺さる圧雪。男の声。名前を呼ぶ、男の声。目を刺す反射光。

「乗っていけ」

　絶対に。
　光のまぶしさが思考を単調にする。ただ一言が耳の奥で響く。いや、いや、いや、いや。

「乗れ」

　腕を強く引く力。後部座席に転がっているベビーシート、プラスチックのおもちゃ。赤、黄色、青。眉間の奥が痛い。みぞおちの奥がぐうと押し込まれる。

「遅刻する」
「道が混んでるんだよ」

　前の自動車のブレーキランプがぼんやりと連鎖する。厚手のダッフルコートを着込んだ学生が左脇を通り過ぎる。彼の速度はとてもゆっくりなのに、私たちを追い越すには十分だった。雪が目に染みる。瞼の奥が痛い。目を閉じると奇妙な形が浮かぶ。割れたガラスのような、雪の結晶のような、あるいはアメーバみたいな。すぐ後の、空間の忘却。

　目を開いた瞬間の世界は青い。対象を失い、視線がさまよう。男の目は前方を見るのを止めて、私の右頬を見ている。小さな、射るような目。ギアにかけられていた左手が離れ、私の右腿に置かれた。目の前で彼の手にカッターが刺さり、鮮血と共に叫ぶ声が聞こえたような気がした。気がしただけ。カッター、そうだカッターが必要だ。二日酔いではない頭痛が最高潮に達する。ドアを開けて出る。

「おい、どこへ行くんだ」
「歩いた方が早い」

　道は硬くしまっている。窓にかかる男の左手には何事もなく、サイズの大きすぎる指輪が光った。私はカッターが幻視だったことを確認する。刃物と血液。最近そんなイメージばかり見ている。

## 3

　新校舎の廊下は階調が淡いからいつも発光しているようにみえる。影も、色も、すべての境界が滲み合ってぼんやりしている。講義室の喧噪が少しずつ大きくなり、ようやく少し体が温まったような気がする。前から二列目、背の高い影、その男の右後ろに座る。

「おはよう」

　そこはいつも朝の光が弱々しく照らすので、冷え切った体を温めるのにちょうど良かった。それに、大きな男の影は眠るのに良い。影が揺れ、男が振り向く。硬質な響きがあった。

「昨日も遅かったのか」
「喋らないで」

　耳の中で何度もリフレインする。遅かった。遅、遅かった、かった。頬の下の机が硬い。それに驚くほど冷たい。男が貸してくれたマフラーを枕にしながら、この講義をすべて寝て過ごすことに決める。男は缶コーヒーを鞄から出す。一階で買ったはずのそれはまだ温かい。あげる。ありがとう。

「寝る。ノート、後で見せて」

　目蓋を朝の弱い光がうっすらと赤く染める。光と、マフラーと、缶コーヒーの温かみを肌に感じながら眠る。時折、光が影に遮られ、お経のような教授の声が聞こえてくる。男のマフラーは、なぜか毛糸の匂いがする。手編みなのかも知れない。手編みの毛糸は、いつもむせ返るような匂いがする。乾燥していて、遠い草原の牧草を思い出させるような。

## 4

　シャンデリアの下で永遠の愛を誓う男と女。毎日、毎日、誰かが愛を誓い合う。愛は沢山転がっている。えり好みしなければ、いくらでも。喧噪。パニックだ。小さなパニックの連続。怒声と、喧噪と、嬌声と、音楽の渦の中でひたすら歩き続ける仕事。高カロリーの料理と、高価なシャンパンの匂い。香水の匂い。けれどその場で歩き続けてしばらくたつと、音も匂いも消えて、合図だけが残る。飲み物の合図、食べ物の合図、困惑と興奮の合図、合図に合うものを選ぶ私たち。

　騒然とするバックヤードの悲惨さは、表舞台が張りぼての上に成り立っていることを教える。粗末なテーブルにパイプ椅子、スチールの可動棚に載せられた大量の食事。何ケースもあるビールとシャンパン、何リットル分もの氷、そして何百個のグラス。それらがあちこちに置かれている。不意に空いた時間を使って化粧室へ一服に行く途中、眼鏡に声を掛けられる。サービス業に眼鏡はまずいよと言うと、すいませんと謝った。

「眼鏡ないのも、似合うと思う」
「じゃあ、そうしようかな」

　体の細い、猫っ毛の、どこにでも、よくいる男の子。きっと私を持ち上げることも出来ない、ひ弱な男の子。そして彼はきっと次にこう尋ねる。

「携帯教えてくれません？俺、電話します」

　彼らはいつも軽薄で真剣で、いつも出会いを求めている。どこかに転がっているはずのそれを、血眼になって探している。落ちていた箸袋に、私は自分の携帯番号と、偽りのメールアドレスを書いて渡した。メールが届かなければたいていの男の子は諦めてしまう。けれど彼はその夜電話をしてきた。メール送ったんですけど、届かないみたいで。彼は素直にそう言った。

「家どこですか。俺、いま外なんです。行っていいですか」
「酔ってるね」
「いま祐樹さんたちと飲んだ帰りなんですよ」

　彼はとても酔っている。今は冬で、外は寒い。凍えるほど、彼の声は震えている、たぶん、寒さで。私の家まで、歩いて二十分はかからない距離に彼はいる。

「いいですか」
「ダメ」
「えー、じゃあそっちがきてくださいよ」
「なんで」
「俺会いたいもん」

　とても素直だ。だから私は彼を家に呼ばなかったし、彼に会うこともしなかった。ただ彼に正しいメールアドレスを教えた。彼からはすぐにメールが来た。「おやすみなさい」。おやすみなさい。なんだか、そのリズムが少し、心地良いような気もする。

## 5

「」

　叫び。男に下から突き上げられて、私は叫ぶ。なんにもないところに何かを作り出すように。何度も、何度も。喉の奥から自分自身が飛び出していってしまうのではないかと思うほど、何度も。そして彼らが求める通りのキスをする。熱くなった舌から垂れた唾液が渇いた喉に張り付くように流れる。ああ、吐きそうだ。全部。それらは一連の儀式であって、彼らのためには、そういう儀式が必要だ。どれほど背筋を空しさと悪寒が走ろうとも止めようとしない。まるでそれですべてが許されるとでも思っているように、幼稚な仕草を繰り返す。けれど最初は怒りと憎しみで熱くなっていた肩の辺りも、次第にぼんやりとしたうずきに変わる。目の前がかすみ、ただ、自分の叫び声と、その反響を聞く。消せないものだけが残り、やがて体が戻ってくる。

　乱暴な男が好きなわけじゃない。自分の叫び声を聴くとただ安心する。彼は私を噛み、首を絞め、身体中を縛り、指で乱暴にかき回す。彼の行為はいつも私を傷つける。けれど彼はそうやってしか快感を与えられないから、私はそれを受け入れる。私はたぶん満たされている。彼と、彼の器官と、彼の欲求によって、私に空いた空洞は、たとえ一瞬であったとしても、限りなく０に近い値まで戻される。

　血と、精液の混ざったピンク色が私の体中に奇妙な斑点を作り、男は最後にそれらを丁寧に拭き取る。男が戸を閉める音がして、静寂が戻る。体中が痛い。ソファの上に横になったまま、動けない。

## 6

　眠る前に電話をする約束がある。昨日はひどく酔っていたが、きっと昨日も電話したに違いない。発信履歴が一時になっているから。彼は私を大事に思ってい る。私はあまり彼を大事に思っていない。どちらかというと、もう、面倒になっている。何もかもが、どちらかというと、面倒だ。

「寝てたの」
「起きてた」
「ごめん遅くなって」
「忙しいんだろ」

　あってもなくても変わらない一言。愛の体重はどんどん軽くなっており、今やそれはすっかり羽根くらいしかない。

「おやすみ、愛してるよ」
「おやすみ」

　ため息と一緒にどこかへ吹き飛ばされてしまうくらい軽い愛の言葉。必要ないその言葉を告げてしまう彼はきっと不安なのだ。不安の重みは今や、彼を地球の中 心に引きずり込むことができるほどに増している。私の愛の重みは彼の不安の質量に変わってしまったのだろう。だから今、私は体が浮き上がるのを必死 で押さえている。このまま質量を失っていったらきっと私は飛べる。夢と同じ速度で、ゆっくりと、不安定に。けれど、どこへ飛んで行くというのだ。

浮遊感が全身を支配する。
アンブレラガール。
古い映画に出てきた、重力を亡くした女。

足元に積乱雲が見える。
色とりどりの傘の円が下や上に見える。

ああ、私はこのままどこかへ行ける。
世界はずっと先まで広がっていて、私はこのままどこまでも飛んで行ける。

閃光。
けれどそれは光ではなく、スピードなのだ。

彼の傘は速くて、そのせいで誰もが安定を失う。
落下していくのはオレンジの傘、薄い緑、透明の傘が幾つか。
それを見ながら私の傘もバランスをなくして、落ちる。落ちる。

この傘の色は赤い。

そして劇場の幕が開く。

## 8

目を覚ますと暗かった。時計はまだ五時を指している。背中から胸の辺りに残る浮遊感が、黒く沈む。いま私を起こした何か。くっきりとした意識が余計に、体の重さを感じさせる。呼吸する。一、二、三。腰と肘の筋肉がだるくて熱い。折れて拉げた傘のようにうずくまる私を、ベッドが意志を持って引きずり込んでしまえばいい。そして私はベッドになり、誰かが眠るのを待つ。人形もいい。誰も愛さないから、誰かが私を好きにしてくれればいい。無惨に引き裂いて、燃やしてほしい。圧倒的な力でこの体を終わりにしてしまいたい。終わりに。完全な収束。極限。完全な、消える？私が。消える。早く朝が来るといい。

世界中を探しても私が見つかるのはここでしかない。私はここから逃げられない。ここは私から逃げられない。そもそも誰も、逃げようだなんて思ってなんかいなかった。ただ目の前の事柄が、ときどきどうしようもなく退屈だ。私たちはすべて平らになる。何もない。あるのはただ、微かな隆起だけ。その隆起さえ、明日目が覚めたら消えている。目が覚めなければいい。このままずっと、目を閉じていられたらいい。完全な収束。完全な終わり。私はいつ終わったのかも知らないまま終わる。ある時、とつぜん。テレビが消えるみたいに。ぷつん。さよなら。

# アンブレラ・ガール

http://p.booklog.jp/book/24058

著者 : 道玄坂杏子
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/dogenzakakyoko/profile

発行所 : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/24058

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/24058

お手にとっていただけて、これ以上の幸いはありません。
ありがとうございます。